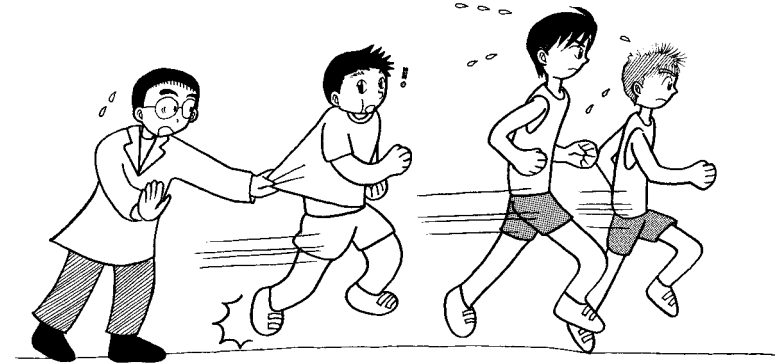


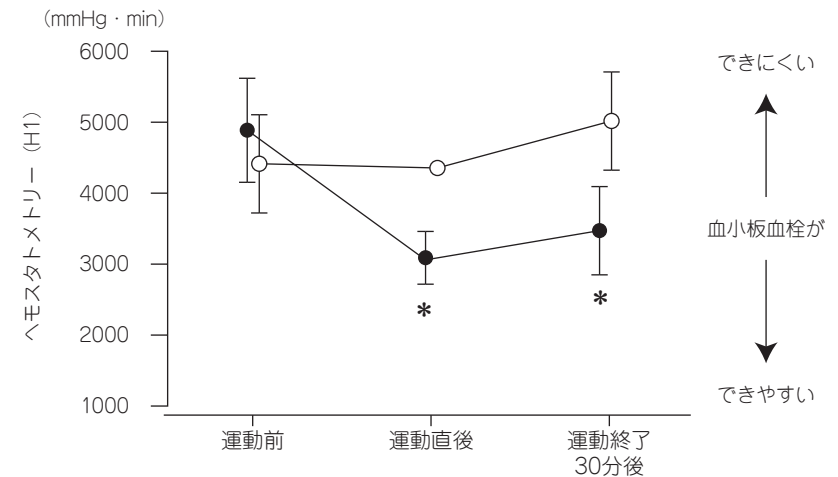
## 急性運動の強度が 動脈血栓形成能に及ぼす影響

研究代表者 神戸商科大学 鷗木 秀夫

生活習慣病予防・改善に有効とされている運動は、一方では冠動脈疾患のリスクを上昇させるといわれています。また、冠動脈疾患発症の原因としては血小板血栓による冠動脈閉塞が考えられています。そこで、本研究では、血栓形成における“ずり応力”という流体力学的要因を評価できる血小板血栓形成法としてのHaemostatometer法を用いて、運動強度の相違が血小板反応性と凝固能に及ぼす影響を検討しました。男性健康者7名を対象として、自転車エルゴメータを用いて、各々の換気性作業閾値（VT）より低い運動強度（90%VT）と高い運動強度（130%VT）の運動を別の日に30分間実施し、血小板反応性、凝固能を調べました。結果は、高強度の運動においてのみ血小板反応性、凝固能どちらも有意に亢進しました。このことは、高強度の運動においてのみ血栓形成傾向が促進されることを示しており、冠動脈疾患のリスクをもつ人では、高強度の運動の実施は避けなければならないことを示唆しています。



冠動脈疾患がある人は、高強度の運動を避けなければならない



高強度および低強度の運動が血小板反応性に及ぼす影響  
●；高強度、○；低強度、\* $p < 0.05$ ；運動前との有意差